

新婚さんのつくりかた
～朝から溺愛注意報～

プロローグ

「ふふーん」

朝から鼻歌を歌いながら、お気に入りのコーヒー豆を手動のミルで挽く。

本当は朝食を作りたいところだが、家事能力が壊滅的な咲良がそんなことをすれば、キッチンは大惨事となるだろう。

咲良ができるのはせいぜい豆を挽いてコーヒーを淹れることぐらいだ。

時間がかかることをしている自覚はあるが、電動より手動のミルでゴリゴリするほうが気持ちいい。

それに手間をかけた分だけ美味しくなる気がする。

コーヒー豆を挽く音と匂いに気分良くしていると、突然後ろからぎゅっと抱き締められた。さらに耳に息をかけられる。

「ふぎゃー！」

背中がぞわつとして思わず変な声が出た。すると、背後からくくくつと笑い声が響いてくる。

「ふぎゃつて、咲良は可愛いね」

「っ、爽が驚かすからじゃない！ 女らしくない叫びですみませんねっ」

「はははっ、咲良はいつだって女らしくて可愛いよ。はい、朝の挨拶」

咲良を抱き締める愛しい旦那様は、今日も今日とて世の女性が一目で恋に落ちそうな魅力的な微笑みを浮かべ、咲良におはようのキスを落とした。

「んっ」

一瞬だけのキス。いまだに慣れない甘すぎる朝の日課だが、爽曰く、新婚は皆こんなものらしい。世の新婚を知らない咲良は本当にこんな甘々な生活をしているのかと疑問に思うが、とはいえ甘い口づけを拒否する気はない。

ちなみに今日は爽も仕事なのでキスで済んでいるが、これが休日なら寝室に逆戻り、なんてこともしばしば。

今も何やら爽の手が咲良の太ももをあやしく撫で始めている。

「爽！ 会社遅れる」

「ちよっとだけ」

くるりと向きを変えられたかと思うと、そのまま爽の顔が近付いてきて唇が重なる。そして、朝からは勘弁してもらいたいくらい深いキスを与えられた。

「ふ……っんう」

ようやく離れた爽の顔は先ほどまでの爽やかさとは一転、色気をまとっており――

「はあ……咲良……」

吐息まじりに呼ばれた名前に、体がカッと熱くなる。

爽は再び唇を重ねると、本格的にキスを深めていった。咲良は受け入れてしまう自分の意志の弱さに内心でツッコミを入れつつ、そっと爽に腕を回す。

自分とは不釣り合いなほど見目麗しい男性が、自分を求めてくれる。そんな誘惑に勝てるはずがない。

一年前には予想だにできなかった。容姿も性格も社会的地位も、全てがパーフェクトと言っても過言ではない爽が、平々凡々な自分の旦那様になるなど。

しかも、身も心もついていくのがやっとなほど溺愛されることになるとは。

一年前のあの時まで、咲良は思いもなかったのだ。

第一章

チュンチュンとスズメの鳴き声が聞こえてくる、初夏の爽やかな早朝。

おそらく多くの人が起き出してきて、朝食を食べ、各々遅刻しないよう学校や会社へ向かっていく時間帯だろう。

しかし、そんな早朝から仕事に追われる女性がいた。

小松咲良、二十九歳独身。

その業界では人気のイラストレーターで、現在仕事の締め切りに追われていた。徹夜の作業と、目前に迫った締め切り時間に追い込まれて、ちょっと危ないテンションになっている。

「後少して終わりだぞ、頑張れ私！ お前ならできる。限界を超えるんだあ！」
鬼気迫る勢いで、タブレットのペンを動かしていく。

どこの会社にも属さず、フリーで仕事を請け負っている咲良。最初こそ仕事もほとんどなく、親のすねをかじって生きていたが、おかげさまで最近では定期的に仕事をいただけて収入も安定してきた。

仕事のないつらい時代があったからこそ、名前が知られてきた今も、できるだけ仕事は断らないようにしている。

それでも断らないとどうしようもない時もあり、なんとか自分のキャパシティを超えないように調整していた。しかし、今回は少しミスをして自分が抱えられる以上の依頼を請け負ってしまったのだ。

おかげで睡眠不足で目の下のクマがひどいことになっている。

お肌の調子も悪い。ただでさえ三十路^{みそじ}路間近でお肌の曲がり角と言われる年齢をすぎているというのに。

しかしそんなことも気にしてられない。

締め切り時間まで後数時間だ。

最後の気力を振り絞って、イラストを完成させると、出来上がった画像を保存して、依頼元にデータを送信。
なんとか締め切りに間に合った。

「終わったあー！」

やり終えた安心感から一気に脱力。机の上に上半身を倒れ込ませた。

「あー、無理。もう手が動かない。というかお腹減った……」

徹夜明けなので眠いはずなのに、ハイに突入していて逆に目が冴えている。

とりあえずご飯だと、ゆっくりと立ち上がる。部屋を出ようとしたところで、全身鏡に映った自分のよれよれの姿を見て、これはまずいと先にお風呂に入ることにした。

ここ最近の疲れを落とすようにシャワーを浴びてサッパリすると、冷蔵庫を開けて缶ビールを取り出す。

そして、腰に手を当てて、ゴクゴクと喉を鳴らしながら一気飲み。

「ぶはあー。風呂上がりの一杯は最高ですな」

仕事も一段落して気分も最高。

そう思っていると、バシツと後頭部を叩かれた。

突然の痛みには振り返れば、雑誌を片手に目を吊り上げた鬼が……

「何するのよ、お母さん」

「何するのじゃないわよ。いい年した娘が平日の昼間からお酒飲んで親父みたいな声を上げていたら、世の母親は怒りたくもなりません！」

「いいじゃない。やっと仕事が一段落したんだから、お酒ぐらい飲ませてよ」

「飲み方というものがあるでしょう。若い女性がそんな格好で、そんな飲み方して、うちのお父さんより親父くさい娘なんて女としてどうなの!? どこかに落としてきた慎重深さとか、淑やかさとかを拾ってきなさい！ もうお母さんは情けなくて情けなくて」

こうなると話が長くなる。それを長年の経験で理解していた咲良は、それとなく話をそらす。

「はいはい、わかりました。それよりご飯ある？ お腹空いちちゃって」

「冷蔵庫に入れてあるわよ」

「ありがとう」

冷蔵庫の中を覗くと、ラップをかけられた朝食が置いてあった。それをレンジで温める。

「お父さんは？」

「とつくに仕事に行つたわよ。今何時だと思ってるの。真つ昼間からお酒を飲む娘と違って、お父さんは普通のサラリーマンですからね」

「はいはい、すみませんね」

こうして文句を言う母親だが、咲良が仕事に追われている時には、何も言わず夜食を用意してくれたり、今のよう朝食を取っておいてくれたりする。

感謝の気持ちがあるので、反抗もできない。

何せ咲良は、家事全般が大の苦手だ。

掃除をすれば逆に散らかり、料理を作れば謎の物体Xを生み出す。

これまで何度か一人暮らしを考えたものの、両親、そして三歳下の妹にすら、やめておいたほうが…と反対され、あえなく断念。今も実家暮らしだ。まあ正直、生活能力皆無な自分が一人で生きていける気がしない。

お姉ちゃんは才能を画力に取られたんだね、が妹の口癖。

どこで育て方を間違えたかしら、が母親の口癖だ。

どちらもひどい言われようだが、父親の「お父さんはそんな咲良も大好きだぞ」という慰めなぐさのほうが地味に傷付いた。

温めた食事をテーブルに並べ、椅子に座る。

「いただきます」

お箸を持って一口ご飯を口に入れた時、母親がバンツと激しく音を立ててパンフレットのような薄い冊子をテーブルに叩き付けた。

ゴックンとご飯を呑み込んでから、母親を見上げる。

「突然びつくりするじゃない、何？」

「これを見なさい」

そう言われて、母親が叩き付けてきた冊子を見る。

「えーと、結婚…相談所？」

書かれている文字を見て疑問符を浮かべる咲良に母親が問う。

「咲良、あなた今何歳？」

「二十九歳ですが？」

「そう、そうよ！ あなた二十九歳なのよ！ それなのにあなたときたら彼氏もいなくて、出会いを求めて外に出かけるでもなく、家に引きこもり。それでいいわけないわ」

「引きこもりって大袈裟おおげさな」

へらへらと笑いながら卵焼きに箸を伸ばそうとすると、その手を母親にべしっと払い落とされた。

「じゃあ、聞くけど。あなた最後に家から出たの、いつだと思ってるの？」

「三日前ぐらいじゃない？」

「十日前です！ もう立派な引きこもりの一員よ！」

本来、引きこもりの定義は、家族以外とほとんど交流をもたずに六ヶ月以上自宅にこもっている状態のことらしいが、今それを言うほど咲良は馬鹿ではない。

「そんなだっけ？ だって仕事が忙しかったんだもん」

「そうじゃなくてもあなたは外に出ないでしょう！ オフの日だって、外に出るでもなく、家でゴロゴロして。ただでさえ家にこもりがちな仕事なんだから少しは日の光を浴びなさい」

確かに咲良が家から出る時といえは、メールや電話では伝えきれない時に行う仕事の打ち合わせか、数少ない友人と飲みに行く時、そして妹の子どもたちをせがまれて公園に行く時ぐらいた。

昨今はネット通販という便利なものが発達したおかげで、服も生活用品も全部宅配業者が家まで

持ってきてくれる。

ネット様々で、引きこもりには嬉しい環境が整えられているのだ。通販万歳。

「たまにはお洒落しやれして外を歩きなさい。あなたったら、いつも同じような格好で。それだっけっていつの服ですか！」

咲良が今着ているのは高校時代に使っていた学校ジャージである。

確かに古いのがこれが一番楽なので、いまだに手放せない。

「友達の楓ちゃんを見習ったらどうなの。いつも綺麗にメイクして、格好も洗練されてて」

「いや、楓と一緒にされても」

友人の楓は一時期読者モデルもしていた、自他共に認める美人さんだ。

メイク、ファッションにも敏感で、いつもお洒落しやれな格好をしている。

一方の咲良はノーメイクが基本で、たまに出かける時も、してるんだかしてないんだかわからないほどのナチュラルメイク。

服にもさほど気を使わない。

というかあまり外に出ないので、数年前のよれよれのTシャツとかを普通に着ている。

「あんただって顔はお母さんに似ているんだから、お洒落しやれすれば楓ちゃんにだって負けないわよ。自信持ちなさい」

「ははは、ありがと」

娘を褒めてるのか、自画自賛しているのか正直わからないが、一応娘を案じてはいるようだ。

「そんなあなたを放置していたら、いつまで経っても状況は変わらないと思ったのよね。ってことで、結婚相談所に登録してきたから」

「……はあ!？」

思わず口の中のものを嘔き出しそうになるのをすんでのところでこらえた。

母親の行動力があり余っているのはいつものことだが、こちらに火の粉がかかってくるのはさすがに見過ごせない。

「何やってくれているの!? 私、結婚願望なんて今のところないわよ」

「あなたもう二十九歳でしょう。十分適齢期よ」

「いやいや、最近は初婚の年齢も上がってきて……」

「だまらっしゃい! 三十歳超えたら後はあつという間よ。あの時結婚していればって後悔しても遅いの。あんただって子どもは欲しいでしょ?」

「まあ、いずれは」

「ならなおさらよ。出産は年齢が上がるほどリスクが高くなるんだから。それに紅葉はとくに二人も子どもがいるのよ、早すぎるなんてことないわ」

「まあ、そうだけ」

「咲良の妹の紅葉は、一男一女の母だ。」

姉の欲目を抜きにしても可愛くて、咲良とは真逆で女らしくて家事全般が得意。

だからこそ咲良は思う。

「お母さんは私が結婚できると思うの? 家事全般不得意、女子力皆無のこの私が」

自分で言っていて悲しくなってくるが、あえて堂々と問うと、母親がそっと視線をそらした。

……できればそこは全力でフォローしてほしかった。

「やっぱり無理だっと思ってるんじゃない」

「だからこそよ。あなたこのまま親に寄生し続けるわけにもいかないでしょう。お母さんたちだっけ年を取るわけだし、今は問題なくても、いつまでもあなたの家政婦をしてられないんだから」

「つまり、新しい寄生先を探せと?」

「まあ、そういうことね」

ぶっちゃけすぎである。

「引きこもりのあなたに、自力で相手を探せるとは思えないから、結婚相談所に登録したのよ。そこで生活能力の高い旦那様を探してきなさい」

「えー」

不満げな顔をしていると、最後通告が――

「婚活しなきゃ、今後一切あなたの食事は作ってあげませんからね」

「私に死ねと?」

「婚活すれば問題ないわ」

「そんな殺生な。それに相手が見つかるとは思えないんだけど」

「大丈夫よ。口コミでも大絶賛の仲人さんなととに念入りをお願いしてきたから」

「はあ……」

もはや拒否という選択肢は存在しないようだ。

仕方なく先ほど叩き付けられたパンフレットをバラバラとめくり、目を通していくと、料金のところで目が止まる。

「ねえ、ちなみに質問なんだけど」

「何？」

「この、コースって色々あるんだけど、どれにしたの？」

コースにはランクがあり、オプションが多くつけばつくほど値段もお高くなっている。

「そりゃあ、一番いいやつにしておいたわよ」

母親はにっこりとして答えるが、咲良のほうはとても笑えない。

「ちよっと、いくらしたの？」

「入会金と年会費で、しめて五十万強かしら」

「どこからそんなお金出てきたの!？」

「あら、そんなの咲良の婚活なんだから咲良のお金に決まってるじゃない」

「どこから!？」

「咲良の豚ちゃん貯金箱よ」

「何勝手に使ってるのお!」

「いやねえ、ちゃんと許可は取ったわよ、あなたに。結婚相談所に登録するから使っていていいかって

聞いたら、うんって言ったじゃない」

「いつー!？」

「咲良が仕事に追われてた時だったかしら」

きつと切羽詰まっっていて、全く聞いていないのに生返事をしてしまったのだろう。

慌てて部屋に行き、五百円貯金をしていた豚ちゃん貯金箱を確認すると、空っぽになっていた。

数年かけてコツコツ貯めたお金がゼロになっているなんて、泣くに泣けない。

「あんまりだ……」

ショックでリビングのソファに倒れ込んでみると、小松家のアイドル、黒猫のまろがのそのそと体の上ののぼってきた。

「まろー。私を癒してくれー」

そう言っってぎゅっと抱き締める。

「アーン」

ちよっと猫らしくない鳴き声はいつものこと。

野良猫だったまろを拾ってきたのは小学生の頃だ。

もうけっような老猫とはいえ、まだまだ元気いつぱい。

黒猫だが、目の上のところだけ毛が薄く、白っぽくなっていて眉毛のように見える。それがやけに公家さんっぽいので、まろという名前になった。

ちなみに元野良猫のくせに毛並みが素晴らしくいい。

ツルツルふわふわ。

いつもならつらいことがあっても撫でてくれるだけで癒されるが、今回ばかりはさすがのまろをもつてしても癒えない。

「私の豚ちゃん貯金〜！」

咲良のその嘆きは、掃除をしている母親にも届いた。

「まだ言ってるの？ 観念して婚活しなさい」

「だってさ〜」

豚ちゃん貯金箱をいっぱいにするのに、どれだけの時間がかかったか。

それに咲良が婚活する気にならないのは、実家の居心地が良すぎて、他人と暮らすことが想像できないのも理由の一つだ。

「そもそも私みたいなのを嫁に欲しがる人がいると思えないんですけど」

「世の中には変わった人もいるのよ」

「母親なら、そこは嘘でも、お前は十分魅力的だから大丈夫よ、ぐらい言つてよ」

「お母さん、嘘はつかない主義なの」

「……」

正直すぎる母親を咲良は恨めしそうに見上げる。

咲良の不満が伝わったのか、母親はやれやれというように溜息を一つ零した。

「五十万の価値が見いだせないと思ったら、クーリングオフもできるから、それまでにどうするか

決めなさい。お母さんはそんな咲良でもいいって言ってくれる、器の大きい人が世の中にはいると思うけどね。あの時の男は器が小さかったのよ」

あの時の男——その言葉を聞いて、咲良の表情が少し変わった。不満一色だったものから迷いがあるものへと。

「……うーん」

母親なりに、咲良の過去の失恋を気にしてくれていたのだろう。

どうするべきか考えているうちにうとうとうとしてきて、いつの間にか眠りに就いていた。

そして突然訪れた腹部への衝撃で、強制的に目覚めさせられる。

「ぐえっ」

蛙が潰れたような声が出してしまった。

目を開けると、まろの代わりに、まん丸の目をキラキラさせて咲良の顔を覗き込む男の子が上に乗っていた。

「おはよう、さくらちゃん」

「……うー、あー、海里か。おはよう」

寝ぼけ眼で、三歳になる甥の頭を撫でる。

「激しい目覚めありがとう、海里。危うく内臓を吐くかと思っただわ」

「どういたしまして」

にこにことしている海里はよくわかっていないようで、舌つ足らずな言葉で返ってくる。

「もう、お姉ちゃんったら、またそんなところで寝て。風邪引いても知らないよ」
その言葉に顔を上げると、妹の紅葉が娘の桃花を抱っこして呆れた顔をしていた。

「あー、紅葉、いらっしやい」

「あーいらっしやい。じゃないでしょう。また徹夜だったの？」

「そうなんだよね、やっど今朝終わってさ」

「人気イラストレーターさんも大変だね」

「まあ、好きなことを仕事にできてる分、恵まれてるよ。食事は何もしなくても出てくるし」
母親が作ってくれるというだけだが。

「いい加減、お姉ちゃんも料理覚えたほうがいいよ」

「紅葉、人には向き不向きがあるのよ」

「そんなこと言ったらいつまでも結婚できないよ」

「……………」

苦虫を噛み潰したような顔で答えを返さずにいたら、微妙な空気を感じ取ったのか紅葉がきよんとする。

「えっ、何かあった？」

「いや、実はね…………」

母親に結婚相談所へ強制入会させられたことを告げると、紅葉は声を上げて笑った。

「笑いごとじゃないんだけど」

「お母さんもお姉ちゃんのこと心配なんですよ。いいんじゃない？ いい機会だし婚活してみれば」

「私に他人と生活ができると思えないんだけどね」

溜息まじりに零すと、紅葉は論すように言った。

「案外いい人と出会えるかもよ。それにお姉ちゃん、海里や桃花が生まれた時に『私も子ども欲しい』とか言ってたじゃない。お姉ちゃん面倒見いいし、いいお母さんになると思うけどな」

「まあ、確かに海里も桃花も可愛いけどさ」

最近ようやく一人で歩けるようになった桃花が、咲良に向かって歩いてくる。

まだまだよたついているが、その姿すらまた可愛いと思ってしまう。

子どもを二人産んで、夫婦関係も良好の紅葉は、見るからに幸せそうで、羨ましいと思ったことは何度もある。

だがしかし、それと同じようなことが自分にできるかは甚だ疑わしい。

とはいえ、甥っ子と姪っ子を見てみると、自分の中にある母性が刺激されるのもまた事実だ。

こんな可愛い子どもにも囲まれ、ママと言われる自分を想像して…………

母親の思惑に乗るのもいいかもしれないと咲良は思えてきた。

まだ見ぬ旦那様と子どもたちとの理想の家庭を夢見て――

「いっちょ、頑張ってみるか！」

「そうそう、その意気だよ、お姉ちゃん。ほら、海里たちも頑張れーって言ってあげて」

「さくらちゃん頑張れー」
「れえ」

海里と桃花にも応援されて、ようやく重い腰を上げることにした。

思い立ったが吉日。

その日のうちに相談所に予約を入れて訪れてみると、品の良さそうなお婦人が迎えてくれた。咲良の担当してくれる仲人さんで、山崎さんというそうだ。

これまでに数多くの結婚を成立させてきたやり手らしいとは母親談。

「よろしく願いますね、小松咲良さん」

「よろしく願います」

「まずシステムについて説明しますね」

そうやって山崎さんは相談所の説明を始めた。

最初に、仲人さんが選んだ男性を紹介される。

昔のお見合いと違って、ネットで相手のプロフィールなどを見ることができるようだ。

それを見て会うか判断。

そうして実際に会って話してみても、お互いに良ければ仮交際。

この仮交際は何人かと同時進行でもいいらしい。

なんだか二股をかけているようでもなんとも言えない気持ちになるが、交際と言ってもまだ仮で、

付き合っているわけではないから問題ないとのこと。

さらに進むと、本交際。

この段階になると新しくお見合いはできないし、その人としか付き合えない。

他に仮交際の人がいなくてもその時点でお断りとなってしまうようだ。

本交際に進み、付き合っていく中でお互い結婚の意思が固まれば、晴れて成婚退会となる。

成婚退会した人の多くが、相手と会って数ヶ月以内で結婚を決めているらしい。そんなスピーディな決断が本当に自分にできるか、早くも不安になった。

それを感じ取ったのか、山崎さんが困ったことがあればなんでも相談してほしいと優しく言ってくれたので、少し気持ちが楽になった。

「じゃあ、これから小松さんのお相手の希望をお聞きしようかしら。どんな方がいいとか、ある？」

「そうですね……」

少し考えて、浮かんできた希望をスラスラと答えていく。

「まずは、煙草、ギャンブル、浮気する人は論外。年齢は三十代で、身長は高くて細マッチョ、年収はそこそこ？ まあ、私も働いているし、ちゃんと真面目に働いている人なら問題ないです。子ども好きは外せませんね。あっ、猫も飼ってるので猫アレルギーの人はちょっと……。容姿にはそこまでこだわりませんが、チャラい人は少し苦手なので、硬派で爽やかな好青年風の人がいいです」

「あ、あのちょっと……」

「後は私の仕事に理解を示してくれる人で、温厚で優しく怒りっぽくない人。結婚して毎日喧嘩とかDVとか嫌だし。それと、変な収集癖とか性癖とかがなくて、金遣いが荒くない人。一番重要なのは料理、洗濯、掃除が得意で、私に家事を押し付けない人でお願ひします。じゃないと私生きていけないので。お前はいつか料理で人を殺すって母親にキッチン出入り禁止にされた私ですから」

と、ここまで弾丸トークで話しきったが、そこでようやく山崎さんの様子がおかしいことに咲良は気付いた。

笑っているのに怒っているような……

「小松さん？」

「な、なんでしょう」

「仕事ができて、性格が良くて、家事も得意な好青年。普通に考えてそんな人がそうそういると思っう？」

「思いませんね」

「仮にいたとして、そんな完璧人間に選ばれる自信があるっていうことよね？」

「いえ、全く」

「……………小松さん」

「はい」

「もう少し現実を見てお相手を考えましようね」

「……………はこ」

希望を言えと言っただけなのに、本気のお説教を受けてしまった。

山崎さんとあーだこーだ話し合いながら、希望を絞っていく。

「……………これならいいでしょう。早速小松さんに合う方を探してみるから、楽しみに待っていてね」

「よろしくお願ひします」

それから少しして、初めてのお見合いの日を迎えた。

相手は中肉中背、ぱっと見は普通のサラリーマンといった雰囲気男性だ。

お見合いということで、普段着ないようなお洒落なワンピースを新調し、いつもよりしっかりメイクをして挑んだ咲良。

ちよつと気合いを入れすぎたかと思っただが、普段がしなすぎなのでちよつどいいかもしれない。

ホテルのカフェで山崎さん立ち会いの下、お互いに挨拶をする。

「小松です、よろしくお願ひします」

「鈴木です。こちらこそよろしくお願ひします」

最初は無難な会話をしつつ、和やかに進んでいたのだが――

「じゃあ、私はそろそろおいとまするわね。後はお二人で」

にこにこ微笑みながら去っていった山崎さん。

途端に静寂が場を支配する。

咲良は話しかけられるのを待ってみたが、相手も同様なのか、嫌な沈黙が続く。

相手も緊張しているのかな、じゃあここは自分からと奮い立ち、咲良は会話を試みる。

「鈴木さんは野球がお好きなんですね。応援しているチームとかあるんですか？」

「あー、はい」

「……………」

いや、そこは応援しているチームを答えて、あなたは？ とか聞き返してくるところだろう。

そう内心思いつつ、再び質問。

「鈴木さんの趣味は釣りだとか？」

「はい」

「どんな魚を釣られるんですか？」

「まあ、色々」

「……………」

そして再びの沈黙。

向こうから質問してくるわけでも、話題を作るわけでもなく、視線さえも合わせない。

やる気あんのかっ！ と文句を言いたいのをグツとこらえ、なんとか笑顔で質問を続けても、返ってくるのは話を続けるのに困るものばかり。

そうしている間にもドンドン精神力がすり減っていく。

一時間ほど話したが、結局、無駄に気を使って疲れただけだった。

もちろん答えはお断り。

電話先の山崎さんに愚痴まじりで、報告する。

「私、こんなの続いたら、やっていく自信ないです」

初日にして先行きの不安を感じる。

「あらあら、私がいる時は普通だったのにね。まあ中には口下手な方もいらっしゃるから」

「そもそもやる気が感じられなかったんですけど」

「まあ、そういう時もあるから。一人目で挫折したら後々続かないわよ。今日のこととは忘れて次よ次」

「わかりました……………」

その後、二人目、三人目と会ってみると、最初の人のように沈黙が続くことにはならず、それなりに会話ができた。ほっとしたものの、可もなく不可もなくという感じで、ピンとくる相手はいなく、お断りすることにした。

最初は和やかに話しているものの、咲良が家事を全くできないと話すと、笑顔を微かに引き攣らせる人ばかりだったのだ。

やはり家事ができないのは、アウトな人が多いらしい。

それでもいいという人もいるのだろうが、今のところ出会えていない。

ふいに嫌なことを思い出した。

学生時代に初めて付き合った人に、自宅に招待された時のことだ。咲良は彼の家で頑張って手料理を作ったのだが、翌日、彼が学校を休み、その夜唐突に別れを告げられた。

好きな人ができたという理由だったが、昨日の今日でそんな馬鹿なと思った。

が、後日、理由は咲良の手料理だと友人に話しているのを偶然聞いてしまった。

あいつの料理は凶器だと、彼とその友人たちが大笑いしながら話していたのが心に刺さった。

料理が原因でフラれたこと。好きな人に笑いものにされたこと。傷付いて大泣きしたこと。それから全て咲良の黒歴史である。

それから咲良が料理を誰かに作ったことはない。一度結婚を考えた人もいたが、その人にもだ。いまだにトラウマになっているその一件。なので、家事を求めない人というのは咲良の中では絶対条件となっている。

その後も何人かと会うものの、話が合わなかったり、結婚後は仕事を辞めてほしいと言われたり、咲良の希望どおりとはいかなかった。

咲良としては、イラストレーターの仕事はようやく叶った夢でもある。結婚しても、出産しても、この仕事を辞めるつもりは毛頭ない。

家事に関しても、できないものではないのだ。こればかりはどうしようもない。

中には、あからさまに上から目線で、家事ができないことを説教してくる人もいた。

もちろん即刻お断りだ。

やはり全てが希望どおりとはいかない。どこかで妥協も必要だとは思いつつも、仕事や生活面のことでは絶対に妥協できない。

それに、これからずっと一緒に生活していく人なのだから、一緒にいて落ち着くというか、楽し

い人がいい。ずっと一緒にいたいと思える人が。

欲を言うなら、相手に恋をして恋をされて、愛し合える。そんな相手と出会いたい。

でも恋愛ではなく、結婚を求めて相談所に登録しているのだから、そのあたりは夢を見てはいけないだろうなと咲良は思った。

一念発起して婚活を始めてみたものの、なかなかままならないものだ。

そんな状況に悩んでいたある日、やけに興奮した山崎さんから電話がかかってきた。

「小松さん、いたわよ！ いたの！」

「えっ、あの、ちょっと落ち着いてください。いたって何が？」

「小松さんの理想のお相手よ！」

「はあ、理想ですか？」

「そうよ。仕事ができて、真面目で、性格もいい爽やか好青年。しかもイケメンよ」

「それはいい報告ですけど……やっぱり男の人って、家事ができない女性にはあんまりいい反応しないみたいで」

「それなら大丈夫よ。お相手はかなりの高給取りで、家事は全て家政婦さんがしてくれているらしいから、結婚しても家事する必要はないと思うわ」

「いや、それは嬉しいですけど、家政婦さんがいるとかどんだけお金持ちですか」

それはそれで、逆に気が引けるような……

「今一押しのお客様なのよ。彼に会いたいわって人が列をなして待ってる状態よ。小松さんは運が

いいわ。もちろん会うわよね、ねっ！」

電話の向こうから、ものすごい圧を感じる。

そりゃあ、家事を求められなくて、性格もいい人なら会ってみたいが、そんな人本当にいるのだろうか。

自分で希望を言っておいてなんだが、そんな人間、どこかしらに問題がありそうな気がする。

「そんなハイスペックな人、相談所に来なくても女性がほっとかないでしょう。何か欠点があったりして……」

「私も最初はそう思ったんだけどね、なんでも会社やその関係の人と付き合うと採めた場合に大変だから、全く関係のない業種の人と出会いたいんですって」

「へえ」

まあ、そういう人もいるのかもしれない。だが、そんなハイスペックな人と話が合うのか心配だ。「とりあえず会ってみたほうが絶対いいわ。こんなチャンス、滅多にないわよ。三十年前だったら私がお見合いましたかったところよ」

「旦那様が泣きますよ」

山崎さんとは婚活の相談がてら、色々世間話もしている。

その中には山崎さんと旦那様との話もあった。結婚して何十年も経つのにいまだにラブラブラしい。羨ましいかぎりだ。

「それより、会うわよね。あちらには了承の返事しておくわよ？」

「山崎さんがそこまでオススメするんですし、私は問題ありませんけど、そちらの方は私でいいんですか？」

「ええ。すでに了承はいただいているわ。後は小松さん次第よ」

「それならお願いします。まあ、駄目元で」

「そんなんじゃない駄目よ。絶対にゲットする心持ちでいかなきゃ」

「まあ、頑張ります」

「ええ、頑張ってください。当日は今まで以上にお洒落くだけしてきて。お相手のプロフィールはネットを確認しておいてね」

そう言つて、山崎さんは興奮したまま電話を切った。

「山崎さん、かなり気合い入ってたなあ」

いったいどんな人物だ？ と、スマホで相手のプロフィールを開いてみる。

プロフィールの写真が表示された瞬間、咲良は目を奪われた。

モデルと言われても頷ける容姿。

笑顔で写っている写真は、咲良が最初に希望したような爽やか好青年風。

でも、ここまでのイケメンを求めていたわけじゃない。

しばらくその笑顔から目を離せなかったが、ようやく我に返つて下にスクロールし、その人のプロフィールを見る。そして、二度目の驚きを体験した。

「まじか」

数日後、相手のプロフィールに衝撃を受けたまま、お見合い当日を迎えた。いつもより念入りにメイクと身だしなみを整える。

前日にも山崎さんからの洒落しやれして来いという念押しがあったので、手先の器用な妹の紅葉を招集して、髪の毛も綺麗にセットしてもらった。

お見合いの時はいつも緊張する咲良だが、今回は今までで一番緊張している。

だが、相手の容姿やプロフィールを見た後では、誰もがそれも仕方ないと言うだろう。

しかもその容姿は、咲良の好みど真ん中。

いや、ちよつと落ち着こう。写真を見て盛り上がった状態で実際に会ったらなんか違った、なんてことはよくあることだ。

咲良が相談所に登録している写真も、スタジオでプロにメイクをしてもらい、プロに撮ってもらった中で一番写りが良かった奇跡の一枚だった。

実際に会ってみて、あまりの違いにがっかりしないか心配だ。お互いに。

とはいえ、相手のプロフィールを見るに、自分が選ばれることはないだろう。何せ相手は選り取り見取りだろうから。

目の保養に行くだけというつもりで、待ち合わせのホテルのロビーに着くと、山崎さんが待っていた。

「待ってたわよ、小松さん。先方はもうお待ちよ、早く行きましょう」

山崎さんがお見合いをするわけではないのに、かなり気合いが入っている。咲良は山崎さんの後についてカフェに入った。

「ほら、あの方よ」

示された後ろ姿に否いやが応でも緊張してくる。

後ろ姿だけでも、身長が高く、すらりとしていてスタイルがいいとわかった。

「お待たせしました、月宮つきみやさん」

山崎さんの声に立ち上がったお相手と向かい合う。

そこでようやく相手の顔が見えた。

写真で見た姿と寸分たがわぬ人がそこに立っていた。山崎さんが興奮するだけあるイケメン顔に思わず見惚みとれてしまう。

「こちらが小松咲良さんです。小松さん、こちらがお相手の月宮爽さんよ」

「はじめまして、月宮です」

どこからか風が吹いてきそうな爽やかな笑顔に、目が釘付けになる。

本当に、何故こんな人が婚活などしているのか。

笑いかけただけで相手をとりこにしそうな笑顔が眩まぶしい。

かくいう咲良もちよつとヤバイ。

「小松さん」

山崎さんに声をかけられて我に返った咲良は、慌てて挨拶をする。

「小松です、よろしくお願ひします」
「ええ、こちらこそ」

にこりと笑いかけてきた顔は優しげで、どこかほつとさせるような安心感もあった。席について、飲み物を注文する。

座る時、それとなく椅子を引いてくれたのには驚いた。

エスコートなど、お見合ひした男性どころかこれまで誰にもされたことがなかった。

しかもごくごく自然な仕草で、普段からし慣れているのを感じる。

飲み物を待っている間、山崎さんが場を和ませるように色々話をしてくれたが、咲良は爽の顔を直視できずにいた。

しかし、俯いたままでは心証が悪いだろう。思い切つて視線を向けると、彼と目が合い、にこりと微笑まれた。

途端、心臓が激しく鼓動する。

イケメンの笑顔は破壊力があることを知った。後光が差しているようだ。

「月宮さんは、小松さんの五歳年上の三十四歳、年齢的にもお似合いね。それにこの若さであるTSUKIMIYAの副社長をされているのよ。本当にすごいわ」

「いえいえ、親の七光りのようなものです。すごいのはTSUKIMIYAをここまでにした、祖父や父ですから」

「あらあら、ご謙遜なさつて」

山崎さんが上機嫌に笑う。

TSUKIMIYAは高級服飾を中心に展開する有名ブランド。

特にTSUKIMIYAのアクセサリーは、女性が男性から一度はプレゼントされたいと夢見る人気の品だ。

ファッションに疎い咲良でも知っている。

彼、月宮爽は、その御曹司で副社長を務めているらしい。咲良の住む世界とは一生かかっても交わりそうにない、上流階級の人だ。

しかも、その地位だけでなく、この並外れた容姿。

山崎さんが興奮して電話してくるのも頷ける。

そりゃあ彼とお見合ひしたいと女性たちが列をなすだろう。

こんな優良物件、そうお目にかかれるものではない。

「それじゃあ、お邪魔な私はそろそろ退散するわね。後はお二人で楽しんでちょうだい」
帰る直前、咲良に頑張るのよと囁いて山崎さんは帰っていった。

それまでは山崎さんが率先して話してくれていたから良かったが、いなくなった途端に緊張してくる。

何を話せばいいのかとぐるぐる思考を回転させていると、ありがたいことに爽のほうから話しかけてくれた。

「小松さんはイラストレーターをなさっているんですね？」

「は、はい、そうです！」

緊張のあまり力が入った返事をしてしまった。

少し声が大きすぎたかもしれないと、咲良は恥ずかしくなる。

爽は、わずかに目を大きくした後、くすりと笑った。

「そんなに緊張しないでください。と言っても、初対面相手には難しいですよね」

「い、いえ、すみません」

「いいえ。それより、どのようなイラストを描かれているんですか？」

「えっと、色々と描いてますが、主に本のイラストとか、ゲームのキャラクターとか……後は企業から依頼されてマスコミキャラクターを描いたりとかですね」

言葉で説明するより見てもらったほうが早いとスマホを取り出して、咲良が描いた、最近発売されたライトノベルのイラストを見せる。

すると、爽はその画像を見て驚いた顔をした。

「もしかしてイラストレーターのサクさんですか？」

サクというのは、咲良がイラストレーターとして活動する時の名前だ。

「ええ、そうですけど……サクをご存じでしたか？」

「ええ、実は……」

と言いながら、爽は自分の鞆から一冊の本を出す。

それはたった今咲良が見せたイラストが表紙を飾るライトノベルだった。

「先ほど本屋へ寄った時に、好きなイラストレーターさんの絵だったので思わずジャケ買いしてしまっただけ」

有名ブランドの副社長の鞆から出てくるとは思わなかったその本に、咲良は驚きでいっぱいだ。

しかし、少しするとなんだかおかしくなってきた、クスクスと笑ってしまった。

「こんな偶然あるんですね」

「本当に。まさかあのサクさんに会えるとは思わなかったです」

「そういった本はよく読まれるんですか？」

「ええ。忙しい合間の俺の趣味みたいなものです。子どもの頃は親が厳しくて学業優先だと言われて縁遠かったんですが、大人になってからはまりましたね。オフの日は図書館で借りたり、本屋に行ったり大人買いしたりするのが楽しみの一つです」

「私も図書館や本屋へはよく行きますよ。資料集めとかも好きなので」

「サクさんがどんな本を読まれているかは興味がありますね。実はサクさんの画集も家にあっただけです」

「えっ本当ですか？」

「本当ですよ。だから今、ものすごくびっくりしてます」

爽はそう言うが、きつと咲良の驚きのほうが勝っているだろう。

だが、そのおかげで咲良の緊張も解けてきた。そこから、お互いに読んだ本の感想やオススメの本、果てはお気に入りのイラストレーターやキャラクターの話へと続き、話題が尽きない。

そして、嬉しいことにお互いに猫を飼っていることも判明した。

「猫のあのツンデレ具合がまたいいんですよね」

「わかります、わかります。構ってほしい時は寄ってくるのに、私が構ってほしい時は来てくれなくて。でも、あのツンとデレのさじ加減に萌えますね」

なんてことを話しながら、お互いの猫の写真を見せ合ったりしていると、あっという間に時間が過ぎてしまった。

気付けば二時間も話し込んでいたようで、お店の人から混んできたので……と退店を促される。今までこんなに話が合った人などいなかったもので、これでお別れかと思うとなんだか寂しさを感じた。

すると……

「あの、もし良かったらですけど、この後ランチでもいかがですか？」

思ってもみない爽からのお誘い。

——まだ一緒にいられる。

そう思った咲良の答えは、当然イエスだった。

爽の後について訪れたのは、同じホテルの上層階にある、見るからに高級そうな和食店。

「ここはどうでしょう？ お嫌いなものはありませんか？」

「はい。大丈夫です」

とは言ったものの、財布の中身が大丈夫じゃないかもしれない。

こんな高級そうなお店、いくらくらいかかるだろうか。

財布の中身を思い出しつつ、咲良は冷や汗をかいた。

まあ、いざとなったら、クレジットカードがあるから大丈夫だろうと気持ちを切り替え、店に入る。

店内を案内されて席に座るまでの間も自然と爽がエスコートしてくれて、そのスマートさに感心してしまう。

知らず知らずのうちに凝視していた咲良に、爽が不思議そうな顔をした。

「何か？」

「あつ、いえ。月宮さんはエスコートがスマートですごいなと思って」

そう言うと、爽は苦笑する。

「きつとそれは叔母の教育の賜物たまものですね。俺の叔母はイギリスに嫁いですが、その縁で俺も大
学はイギリスに留学してたんです。そこで女性のエスコートの仕方を叩き込まれたので。スマー
トにできていたなら良かった」

この容姿にこのスペックで、女性の扱い方も丁寧とか、なおさら女性が放っておかないだろう。

「素晴らしいと思います。日本の男性で、自然とエスコートができる人は少ないですから」
「そう褒めていただけると照れますね。ありがとうございます」

はにかむように笑った爽に、そんな顔もイケメンだなあと咲良は感心する。

その後も話しながら食事を楽しむが、やはり爽とは話が合う。

会話をしているとても楽しく、もっと話したいと思ってしまう。

今日が初対面だというのにそう感じないのは、好みが合うからなのか、爽の話し方が穏やかで親しみを感じさせるからなのか。

爽が終始笑顔で優しい表情を崩さないせいもあるだろう。

TSUKIMIYAの御曹司というから、偉そうだったり気難しかったりするのではないかと身構えていたのだが、いい意味で爽は咲良の予想を覆^{くつがえ}してくれた。

確かに言葉遣いが丁寧だし所作も綺麗なので、きちんとした教育を受けているのだろうなと思う。しかし、自分のスペックを鼻にかけることはなく、庶民な咲良と話していても違和感を覚えさせないほどに気安い。

生まれた環境も、現在の生活スタイルも違うはずなのに、まるで昔なじみのように話が盛り上がった。

男性といてこんな楽しく感じたのは初めてだ。

まだまだ話し足りなかったが、食事はあつという間に終わってしまった。

「今日は楽しかったです」

「こちらこそ。食事もご馳走になってしまって、申し訳ありません。ありがとうございます」

「いえいえ、小松さんとの楽しい時間をいただいた代価としては安いものです」

こんなところでも紳士な面を見せる爽。

支払いは咲良がお手洗いに立った間に済まされていた。支払い方までスマートとは、爽の叔母の

教育というのは素晴らしい。

「では、今日はありがとうございました」

「ありがとうございます」

そう言って解散となったが、別れた直後から寂しさを感じる。

あれは絶対に女にモテるに違いないと、帰り道で咲良は思った。

咲良が何人目のお見合い相手かはわからないが、爽を巡って女たちの熾^し烈^{れつ}な争いがありそうだ。

そう思うのと同時に、自分が選ばれることはないなという諦^{あきら}めの気持ちに襲^{おそ}われた。

咲良よりもっと綺麗で素敵な女性でも、爽なら簡単にゲットできるだろう。

家事もできない、女子力も低い咲良が選ばれる可能性はないに等しい。

だが、こんなに話が盛り上がった人は今までいなかったもので、この後お断りの返事が来るのかと

思うと落ち込みそうだ。

咲良は爽と会ったことを後悔し始めていた。

彼と会った後では、他の人と会ってもどうしたって比べてしまうだろう。

今後の活動に支障が出てしまいそうだな、と咲良は溜息をついた。

家へ帰ってきた咲良を興味津々で母が迎える。

「おかえり。どうだった？」

「うん、イケメンだった」

「そうじゃなくて、うまくいきそうなの？」

「無理じゃないかな。今までで一番話してて楽しかったけど、相手がハイスペックすぎて私なんか相手にされないって。だって、あのTSUKIMIYAの御曹司だよ」

「あらそう、残念ね。にしてもそんな人まで婚活するのねえ」

「ほんとだよね。女性には困ってなさそうに見えたけど」

「私も見てみたかったわ。イケメン御曹司」

見てどうするんだと思ったが、ただ見ただけなのだろう。母はミーハーなのだ。シャワーを浴びて、軽く仕事をする。

締め切りまではまだ余裕があるので動かす手ものんびりだ。

これが締め切り間近になると、顔の表情も手の動きも鬼気迫るものになるのだが。メールを確認したりしながら、依頼内容に沿うようにイラストを描いていく。

フリーで仕事をするこのメリットは好きな時に休めて、好きな時に仕事ができることだろう。

その分、依頼が来なければ収入もなくなるというデメリットもあるが、会社に所属して働くよりは、家で自由に仕事をするほうが咲良には合っていた。

仕事が一段落したので、休憩をしようとした時、電話が鳴る。

携帯の画面には『山崎さん』の文字。

きつと今日の結果についてだ。

咲良のほうはすでに、仮交際に進みたい旨を伝えているので、爽からの返事が来たのだろう。きつと悪い返事だろうなと考えると、聞くのが憂鬱ゆううつになってくる。

もう聞かなくてもわかっているだけに、改めてノーと言われるのはしんどい。

また会いたいと好感を持った相手だから、なおのことだ。

だからといって無視するわけにもいかないので、電話に出る。

「もしもし」

「小松さん？ 山崎です」

「はい、お疲れさまです」

「やったわよ！」

興奮が抑えられないという様子が声から伝わってくる。

「何がですか？」

「月宮さんから、オツケーの返事をいただいたわよ」

上機嫌な山崎さんの言葉。

だが、咲良はすぐには理解ができなかった。

「へ？」

「だから、月宮さんから、仮交際に進みたいって返事があったのよ」

「……マジですか？」

「マジ、マジ、大マジよ。やったわね、小松さん！」

「……………ええー!!」

一発逆転ホームランを打った気分とはこういうものだろうか。

絶対に無理だと思っていたのに。

爽と話して楽しかったが、同じように彼も楽しいと感じてくれたということなのか。

そう考えると、じわじわと嬉しさが湧き上がってくる。

「小松さんが仮交際までいくのは、これが初めてね。でもあくまで仮交際だから、気を抜かず頑張つて。仮交際成立ということで、今日の夜に月宮さんのほうから小松さんの携帯に電話があるから、ちゃんと取つてね。今後はお二人で相談して会う日などを決めていってちょうだい」

「は、はい」

あまりの驚きに、ろくに話が耳に入っていない。

電話が切れた後、夜に爽から電話が来ると言われたことを思い出して、慌てる。

「えっ、えっ、電話？ 何話したらいいの!？」

しばらく混乱する咲良だった。

夕食を掻き込むようにして終わらせた後、スマホを目の前に置きベッドの上で正座して待つ。

別に正座をする必要はないのだが、気分的にその体勢で落ち着いた。

横からまろが遊んでとちよっかいを出してきたけれど、今はそれどころではない。相手をできないでいたら、拗ねて寝入ってしまった。

冷静に考えれば、いつかかってくるかわからないものをじっと待っていても仕方がない。仕事でもしながら待とうかとも思ったが、やはり気が散って手につかない。早々に諦めて、ベッドでの正座に逆戻りした。

本当にかかってくるのだろうか。なんだか疑わしくなってきた。

だが、山崎さんは確かに言っていたではないか、と睨むようにスマホを見つめる。

悶々もんもんとしながら待ち構えていると、登録していない番号から電話がかかってきた。

取るうと思えばワンコールが終わる前に取れたのだが、それだとまるでずっと待つてましたと言わんばかりで恥ずかしい。

いや、実際にそうなのだが。

結局咲良は一度深呼吸してから、電話を取った。

「はい、小松です」

緊張して若干声が裏返ったが、このくらいならわからないだろう………と思いたい。

「小松さんですか？ 月宮です。こんばんは」

電話越しだと、側で爽が話しているようでむず痒い。

「気恥ずかしさを隠すように、声までイケメンかよ！ と内心ツッコむ。」

「こんばんは」

「今日はありがとうございます。いい返事をもらえて良かった。女性とこんなに話が盛り上がったのは初めてで、すぐに次に進みたいと連絡したんですよ」

「私も！ 私もすごく楽しかったです」

爽も同じように感じてくれていたと知って、咲良は嬉しくなった。

「それですが、もし良ければ今度の週末、食事にも行きませんか？」

「はい、是非」

断る理由などあるはずがない。

仕事を押しても行く。無理してでも行く。這いずってでも行く。

「良かった。お嫌いな食べ物はないとおっしゃっていたので、俺のオススメの店でもいいですか？」

「月宮さんのオススメのお店ですか。どんな料理を出すお店なんですか？」

T S U K I M I Y A の御曹司のオススメということは、庶民が行かないような高級店ではなからうか。

そうだとすると楽しみなような、気が引けるような。

けれど爽のすすめる店がどういうものか知りたい。それは、爽がどういうものが好きなのか知りたいという彼への興味だ。

「それは行つてからのお楽しみということで」

もったいぶる爽に、咲良はくすりと笑う。

「了解です。どんなお店か楽しみにしていますね」

「きっと、楽しんでいただけたと思いますよ」

「自信满满ですね」

「はい。今日話した小松さんの感じなら絶対に大丈夫だと思います」

お互いにクスクスと笑いながら電話越しに話す。

爽の話し方は柔らかかで、聞いていて心地がいい。

電話越しでも癒しのオーラが漏れ出ているようだ。

その後、待ち合わせの場所と時間を決めた。

「それでは週末に」

「はい、よろしくお願ひします。おやすみなさい」

「おやすみなさい」

電話を切った後、思わずベッドの上をゴロゴロと転がる。

まるがびつくりして飛び起きたのが見えたが、謝る余裕もない。

しばらくして冷静になると、今度は恥ずかしさが襲ってきた。

これではまるで、恋する乙女のようなではないか。相手は今日一度話しただけの人だというのに。
「週末か……」

それまでの数日間がやけに長く感じる。でもその分、ゆっくり準備ができるな、と思ったのだが……

爽と出かける日の前日は、戦争状態だった。

咲良が最後に男性と二人でお出かけしたのなんて、遠い過去の話。
服はどうする？ と、咲良は悩みに悩んだ。

お見合いの時は、ホテルでの待ち合わせということ、よそ行きのキレイめワンピースを着ていったが、それはお見合いの時いつも使い回していたものだ。

そういう時に使える服を、なにせほとんど持ってない。

お見合いの時と同じものを着ていくわけにはいかない。だが普段から女を捨てていると家族にも友人にも言われる咲良が持っているのは、カジュアルな服ばかり。

「ノオオオ。服がないっ！」

今から服を買いに行くか？

いや、しかし、何を買ったらいいのかわからない。

困り果てた結果、咲良は友人の楓に連絡することにした。

「神様仏様楓様、助けて〜！」

「何よ、第一声に大声出して。鼓膜が破れるかと思っただわ！」

「ゴメンゴメン。でも困ってるのよ。今から楓の家に行っていく？」

「まあ、いいけど、何かあったの？」

「会ってから話す」

そう言い終えると、電話を切り、スマホだけ持って家を飛び出した。

楓の家は咲良の家から徒歩五分のところにある。

楓とは、幼稚園から高校まで一緒に腐れ縁。いわゆる幼なじみというやつだ。

親同士も仲がいいので、家の行き来は多かった。

就職して楓は実家を出たが、このあたりは立地が良くて通勤もしやすいので、一人暮らしのアパートも近所だった。

たいして距離が変わらないのなら実家から出る必要はないのでは？ と咲良は思ったが、一人のほうで自由にできるからとのこと。

家事ができない咲良には羨ましい限りだ。

咲良なら一週間で家が汚部屋と化すだろう。食事もカップラーメンだけで生きていきそうだ。

楓の家までダッシュした咲良は、インターホンをピンポンピンポンと、連打する。

扉を開けるなり「うるさいわ！」と楓が怒鳴るが、咲良はそれどころではない。

「楓〜。私の心の友よ、助けて〜」

「無性に追い返したくなったわ」

「そんなこと言わないでよ。お邪魔します」

勝手にずかずかと部屋に入る咲良に、楓は深い溜息をついた。

「あんなね、今日は金曜日よ、わかる？ 平日土日関係ないあんと違って、私は仕事してたわけよ。疲れて仕事から帰ってきたところなのよ」

「わかっているって。でもこっちも非常事態なの」
「なんだってのよ、もう……」

文句を言いつつも、楓は咲良を追い返そうとはしなかった。

咲良は部屋に入ると、我が物顔で適当に座る。

いつものことなので楓も文句は言わず、冷蔵庫から缶酎ハイを二つ取り出すと、片方を咲良に渡して、自分も座った。

そんな楓に、咲良はこれまでのことを簡単に話す。

母親に結婚相談所に強制入会させられたこと。

そこで、すぐ話の合う人に会ったこと。

それがTSUKIMIYAの御曹司で、超イケメンの紳士だということ。

その人と明日会うというのに、服がないということ。

大まかなことを聞いた楓は、酎ハイを飲みながら他人事のような反応を返す。

「ふーん、おばさんもうとう強硬手段に打って出たわけだ」

「楓だって結婚してないのに。横暴だと思わない？」

「私は結婚してないけど彼氏はいるわよ」

「一年続いたためしがないくせに」

「ぼそつと言うと、地獄耳の楓がぎろりと睨んだ。

「協力してあげないわよ」

「わーん、ごめんなさい。楓は熱しやすく冷めやすいだけですよね。それと駄目男好き」

「それはそれでむかつくわね」

若い時に読者モデルもしたことがある美人さんなのに、付き合う男付き合う男、みんなダメメンズなのだ。

浮気男、ヒモ男、ギャンブル男、マザコン男、etc.

そりゃあ、一年続くわけがない。

男運が悪いのか、見る目がないのか。

「にしても、あのTSUKIMIYAの御曹司か。よくそんな捕まえたわね」

「つていつても、まだ仮交際っただけで、この後解消っすることもあり得るから、どうなるやら」

「そっちのほうが可能性高いんじゃないの、咲良なら。なんせ女子力皆無だし。戦闘服はジャージだし」

「不吉なこと言わないでよ。ほんとになりそうで怖い。てか、ジャージの何が悪い。着やすいじゃない」

「今時は着心地が良くて可愛いルームウェアだっただくさん売ってるわよ」

確かに、楓が着ている部屋着は女子力が高そうな可愛いものだ。

だが、今はそんな話をしている場合ではない。

「そんなことより、明日の服。ねえ。どうしたらいい？」

「何年も男の影も形もない引きこもりの咲良に、デートに着ていく服なんてあるはずないわよね。私と出かける時もジーンズにパーカーで来る女だから。後日改めて服を買いに行くとして、とりあえず明日の服か……」

耐ハイをテーブルに置いた楓が向かったのはクローゼット。

そこには、咲良のクローゼットには絶対には絶対にある、大人可愛い服がたくさんある。さすが、お洒落な楓のクローゼットだ。

「そうねえ……」

考え込みながら次々に服を見ていった楓は、その中からいくつかの服と小物をピックアップした。「えっ、これ？」

それらは楓の持つ大人可愛い服の中でも、かなりカジュアルなものだ。

正直、拍子抜けである。

「これに合う靴なら持つてるでしょ？」

「まあ持つてると思うけど。えっ、ほんとにこれ？」

初デートとは思えないカジュアルさ。一応ワンピースではあるが、大人なパンプスよりむしろ咲良が普段履いているスニーカーのほうが合いそうなデザインだ。それでも普段着とまではいかない、仮に高級レストランにつれていかれても、そこまでは浮かないだろう。

しかし咲良らしくはあるとはいえ、せつかくの初デートなのだから、もつと相応しい服があるのではないだろうか。そんな思いが表情にも出ていたのか、楓がぎろりと睨んでくる。

「何か文句ある？」

「だって楓ならもつときれいめの大人っぽい服、たくさん持つてるでしょ？ 何ゆえこのチョイス？」

「その御曹司とは結婚前提で会うんでしょうが」

「まあ、結婚相談所で会った人だからね」

「気合い入れて普段の咲良と全く違う姿で気に入られたとしても、後々ボロが出てフラれることになつたら困るでしょ。普段の咲良を見せつつもちよつと出すよそ行き感。我ながら完璧なコーディネートだわ」

うんうんと、楓は一人悦に入っている。

「自画自賛かよ。つてなんでフラれる前提なのよ」

「あんた前科持ちでしょうが。それが理由でフラれたこと、忘れたわけじゃないでしょう」

「うっ、痛いところを……」

忘れたい咲良の黒歴史その二。

以前、咲良には真剣交際をしていた男性がいた。しかしデートで見せていた姿と素の姿にギャップがありすぎてフラれたのだ。

『普通に引くわ』——あの時の男の顔や言葉が脳裏を過り、咲良を落ち込ませる。

立ち読みサンプル はここまで

結婚も考えていた男性との、痛烈な出来事。

幼なじみなだけに、楓は容赦なく咲良の痛いところをグリグリと抉ってくる。

腫れ物に触るように気を使われるのは嫌だが、直球で言われるのもそれはそれで辛かったりする。「気合い入れすぎ、ギャップの出しすぎは後々面倒よ。結婚を考えてるなら多少は普段の咲良を出さないで、いずれ自分の首を絞めることになるわ。前みたいにね」

「わかった。だからあれの話はしないでよ。記憶から抹消したいのにい」

「はいはい。まあ、世の中あんな男ばかりじゃないから」
ポンポンと肩を叩かれる。

「取って付けたようなフォローをありがとう。ダメメンズホイホイの楓には正直言われなくなかったけど……」

「そんなこと言うなら服貸さないわよ」

「神様、仏様、楓様、ありがとう！」

楓に見捨てられたら本当に後がない。

「はいはい。けど、今度買い物に行くわよ。毎回借りに来られたんじゃ迷惑だわ。あつ、その服はあげるわ。たまには違う感じのもいいかと思って買ったけど、やっぱり私の趣味じゃなかったから」

「ありがとう」

「それと、結果も教えなさいよ」

「了解であります」

ビシッと敬礼する咲良。

なんとか明日の服を用意できて、ほっとする。
持つべきものはお洒落な親友だ。

そうして迎えた初デート当日。

指定された待ち合わせ場所にて待っていた咲良は、何度も鏡を出しては、おかしなところがないか確認していた。

お見合いの日より緊張している気がする。

お見合いの時は、初対面の人と会うことへの緊張だったが、今は爽に変に思われたくない、嫌われたくないという思いからの緊張だ。

爽は、仮交際が成立した日から毎日電話をくれた。

数分だけの時もあれば、一時間近く話すこともある。

毎夜爽からの電話を心待ちにしている自分がいた。

日ごと爽に惹かれてしまっていることに、気付かないわけにはいかなかった。

最初はその綺麗な容姿と所作に目を惹かれたけれど、今はそんなことは関係なく、爽と話をして
いるだけでときどきする。

T S U K I M I Y A の副社長をしているだけあって、知識の幅も広く、話題も豊富な爽。